根本中堂にて読経される大樹孝啓天台座主猊下

マイナスをプラスへと転換する

来たる3月16日に天台宗祖師先徳鑽仰大法会が総結願を迎える。平成より元号を跨ぎ執り行われた期間中は、各教区、檀信徒ご尽力のもと天台宗と総本山延暦寺が手を取り合い事業に取り組んできた。

この度の祖師として挙げられていたのは、平成25年御祥当の慈覚大師一千百五十年御遠忌、平成28年の恵心僧都一千年御遠忌と伝教大師御生誕一千二百五十年、平成29年の相応和尚一千百年御遠忌、そして令和3年の伝教大師一千二百年大遠忌である。

大法会の当初の予定は、令和3年までの会期であったが、全世界を脅かした新型コロナウイルスは日本全国にも感染拡大し、結果1年間の延期となったのである。

振り返ってみると、この11年間には、印象深い出来事が多く挙げられる。平成24年、消費増税法の成立、平成26年のラグビーW杯では日本が歴史的勝利を挙げた。平成31年には、憲政史上初となる譲位での皇位継承が行われ、元号が「令和」となった。令和2年には新型コロナウイルスが全国を襲い、同年4月には緊急事態宣言が全国各地で発令され、延暦寺も閉堂を余儀なくされた。

先に挙げた出来事の他にも、大雨や台風といった自然災害が各地で頻発、平成30年には台風21号が比叡山を襲い延暦寺研修道場居士林が倒壊するなどの被害を受けた。

記憶に新しいのは、「世界宗教者平和の祈りの集い」35周年の式典のさなか、突如叡山全体を雷雨が襲った時のことだ。打ち付ける雨脚、激しく雷鳴轟く中、大樹孝啓天台座主猊下はそれらを「神仏の激励」と言い表された。猊下のご機転に感銘を覚えたのはもちろん、そのお言葉からマイナスをプラスへと転換する大切さを心に刻んだ。

コロナ禍もあり大法会期間中は思うように進まないことの連続だったが、視点を転換してみると、日々当たり前に過ごせていた事の有難さ、周りの方々との絆をより一層強く実感することができたように思える。

大法会は結願となるが、関連事業となる「国宝根本中堂大改修」は、落慶に向け工期を延長し更に5年間工事が続いていく。また間もなく伝教大師の得度受戒一千二百五十年も迎えることとなる。伝教大師のみ教え、そしてその象徴である「不滅の法燈」を後世に適切な形で伝えるために、今後も気を引き締めながら歩みを進めたい。

比叡山時報

発行所
比叡山時報社
jihoh@deluxe.ocn.ne.jp
大津市坂本本町4220
郵便番号 520－0116
電話 077－578－0001
振替 00970 －2－ 9732
宗教法人延暦寺事務所
定価 1部110円 年1200円

延暦寺広報

叡山講福聚教会
会　報
年度会費（3000円）中に会報（比叡山時報）購読料を含む。

令和5年比叡山から発信する言葉
真の心を開き発こす

ご購読は延暦寺ホームページから

国立劇場で「山王礼拝講」を奉修

初代国立劇場 さよなら公演

場内に響く天台声明の調べ
日吉大社での神前法要を再現

春の訪れを予感する陽光に照らされた2月25日、国立劇場（東京都千代田区・独立行政法人日本芸術文化振興会＝河村潤子理事長）大劇場において、比叡山延暦寺を始めとした天台宗の僧侶出仕のもと、初代国立劇場さよなら公演「比叡山延暦寺の神前法要 日吉大社の山王礼拝講」と題した声明公演が執り行われた。そこで今般は、公演の詳細を報告すると共に、延暦寺と山王総本宮日吉大社（大津市・馬渕直樹宮司）の不離一体の象徴である論義法要「山王礼拝講」と、連綿と受け継がれる仏教音楽「声明」を紹介する。

優雅な音調の天台声明
儀礼に導入された仏教音楽

声明とは仏教の法要で唱えられる声楽曲で、通常聞き覚えのある読経とは異なり抑揚やリズム、旋律をもって唱えられる仏教音楽のことをいう。我が国では仏教伝来と共にその儀礼に導入され、奈良時代には東大寺の大仏の開眼供養で大規模に声明の法要が行われていたことが知られている。

平安時代になって伝教大師、弘法大師らが留学僧として新たに唐の仏教儀礼を学ばれ、特に慈覚大師は、本格的に比叡山に中国唐の音曲を伝えられた。

平安末期には、融通念仏宗の開祖でもある良忍上人が、京都大原において天台声明の伝承を集大成し、鎌倉時代に入ると、声明の楽理などの研究が進んだ。鎌倉新仏教の各宗祖が比叡山から多く輩出されたことが所以となり、各宗派の仏教儀礼における声明もそれぞれの流れを汲みながら独自の伝承が始まった。

また、声明は僧侶だけの伝承ではなく、後白河法皇や室町幕府第三代将軍足利義満公なども天台声明の達者として知られており、民間へ伝承された後には日本独自の平曲や浄瑠璃などを生み出す母体ともなった。

天台声明はゆったりとした音調で、平安の王朝文化を思わせる優雅さがその特徴といわれる。「男性的」でダイナミックという真言宗の声明に比べて「女性的」、また天台寺門宗の「怒り節」に対しては「泣き節」とも称される。

その特徴のひとつに「ユリ」という旋律があり、波のように浅くなめらかに或いは深く力強く音を上下させる旋律で聴く人をうっとりとした気持ちにさせる。しかし「ユリ」、キリ三年」という言葉で表されるように大変難しく、時間をかけて習得がなされる。

声明を唱えると共に華（樒）を撒き神仏にお供えする

堂内で唱えられる声明（山家会曼荼羅供にて）

神前法要「山王礼拝講」
神仏不離一体の象徴

比叡に新緑が萌ゆる毎年5月26日、山麓の山王総本宮日吉大社西本宮では、拝殿に八講壇が特設され、優雅な天台声明とともに3時間にもわたる本格的な講経論義法要が神前で厳修されている。

この法要は「山王礼拝講」と呼ばれ、延暦寺一山住職の若手が出仕する重要な法要で、現在において山王の神々の御前にて完全な形の法華八講を伝承する非常に珍しい法要とされる。

伝承によるとその起こりは、11世紀前半に日吉社周辺の樹木が枯れたことを「修行を怠る比叡山の僧侶に対して日吉の神様が戒めたもの」と考え、神前にて修学の研鑽を披露するようになったとされる。また比叡山に残る資料では、鎌倉時代に出内で、諸宮の勤行を遂行する堂衆と教学研鑽を旨とする学生との武力闘争「行学合戦」等の抗争が頻発し、それに頭を悩ませた後の第68、72代天台座主承円（1180～1236）が、承元2年（1208）、日吉社の下殿で百ヵ日の参籠を奉修したことを始まりと伝える。どちらの説も悪僧否定と教学振興の再興を願っていることがうかがえ、山王礼拝講は僧風の刷新を期待して始修されたと考えられている。

西本宮拝殿での礼拝講奉修

山王礼拝講は、八巻に軸装された天台宗の根本経典『妙法蓮華経』を講義する「法華八講」をもって執り行われるが、その歴史は古く、延暦15年（796）、石淵寺の勤操が4日間に亘って法華経を講説したのが始まりとされる。

法要で注目すべき講義を行う「講師」に対して、「問者」が質問し、再び「講師」が答えるという質疑応答の場面である。

これは、「論義」と呼ばれる形式で、僧侶が問答を繰り返しながら仏教学の理解を深めることを最大の目標としている。

比叡山では法華大会を始め、長講会等多くの論義法要がみられ、比叡山を表す四文字「論証奠貧」の「論」とは、この論義の盛んである様を表したものとされる。

中世より連綿と受け継がれてきた山王礼拝講は、明治初頭の神仏分離令、またそれによって引き起こされた廃仏毀釈のため引き離されることとなった。以降は近くの讃仏堂という堂舎を使用して修することを余儀なくされるが、戦後となり日吉大社と比叡山の不離一体の象徴として再び西本宮へと場所を戻し現在も古式ゆかしく伝承されているのである。

神仏分離後も守り続けられた西本宮下殿

伝統芸能を未来へとつなぐ

独立行政法人日本芸術文化振興会 理事長 河村潤子

このたびは、初代国立劇場さよなら公演にご出演・ご協力を賜りまして、まことにありがとうございました。

国立劇場の声明公演は、現在非常に人気の高い公演として、お客様にご愛顧いただいておりますが、比叡山延暦寺様に第一回声明公演へご出演を賜り、その基礎を築くことができたことから始まりました。

儀礼として行われていたものを舞台上で公演としてご披露いただくことについて、天台宗法儀音律研究所の中山玄雄大僧正・天台真盛宗法儀音律研修所の片岡義道大僧正はじめ、多数の皆様のご助力により実現し、現在まで続けて来られましたことに、心より感謝申し上げます。

今回の公演には、第一回公演にもご出演された僧侶の方々のお弟子さん方にもご参加をいただきました。国立劇場はこの十月をもって閉場し、六年にわたる建て替えが予定されておりますが、日本が誇るすばらしい伝統芸能の数々を、より多くのお客様に親しんでいただき、未来へとつなげていけるように、役職員一同、さらに努力と工夫を重ねてまいる所存でございます。延暦寺様には、末永く国立劇場にお付き合いいただければ幸いに存じます。

声明公演「山王礼拝講」始まる
優雅な旋律に引き込まれる聴衆

一之座での問答往復

国立劇場「あぜくら」

今般の公演が開催される国立劇場は、奈良時代を代表する文化遺産、奈良東大寺正倉院の「校倉創り」をモチーフに建築されたもので、威風堂々とした風貌である。

国立劇場と比叡山延暦寺は深いご縁で結ばれており、昭和41年の第一回こけら落とし公演では、それまで門外不出であった延暦寺の法儀音律が初めて世に出され、多くの人々の心の奥深くに仏教の伝承が浸透されたことが記録に残っている。

公演は、午後2時から予定され、開演45分前に始まった開場には、すでに観客が列をなして待機していた。

開演10分前、大劇場の1500を超える座席はほとんど全てが埋め尽くされた。劇場内のライトが落とされると辺りは水を打ったように静まり、皆息を呑んで公演開始を待ちのそむ。

神職による祝詞奏上

解説する水尾執行

大神お迎えし礼拝講を厳修

舞台上の照明が少しずつ明るくなると、水尾解説が延暦寺執行が舞台袖より入場。神仏が一体となった伝統法要を聴衆に紹介できる喜びと少しの緊張を面持ちに表わしながら挨拶し、丁寧に法要の解説を行った。

沈黙のなか舞台へ続く花道を日吉大社の須原紀彦禰宜と同社神職を先頭に、朱傘を差された藤光賢探題大僧正が入場され、後には比叡山延暦寺並びに天台宗僧侶が静々と行道しながら続いた。

舞台への入場では、実際の法要修修の際に「僧侶が山上から二目散に大宮（西本宮）へと駆け付け楼門前にて足を濯いだ」との伝承に伴う「禊の化儀」が再現され、同社の拝殿を再現した舞台に全員が着座して、声明公演「山王礼拝講」が始まった。

舞台上では俗世間の穢れを祓い浄める「修祓の儀」が執り行われ、その後神職により大宮本殿の主祭神である山王の大神（大己貴神）に供物を献上する儀式「献饌の儀」、続いて大神を称えその御威光を羅かす「祝詞」が奏上された。

問答をご精義される藤探題

名手が揃い声明唱える

休憩を挟んだ第二部は五之座から勤められ、行道等の動きを伴う第一部とはひと味違った進行に聴衆は見入った。「エンバイ」などの手法を駆使し抑揚をつけて唱えられる声明の旋律は、劇場内を優雅で心地よくも力強く響きわたった。また、通常の山王礼拝講では浅膓の若手住職や、未だ住職を拝命していない籠山修行中の僧侶によって勤しまれる法要であることから、唱えられる声明は大神の御威光によって浄められたかのような静寂の会場のなか、舞台上では講師と読師が八講壇へと登壇し二之座が始まった。法要は「唄」、「散華」にて華やかに声明が唱えられ「表白」へと続き、講師を勤める延暦寺一山恵雲院清原徹雄住職により「国立劇場に大権現を迎え日吉の社となし」と宣言されたうえで、大神に礼拝講の論義法要が永遠に受け継がれていくことが願われた。その後「問答往復」にて実際の神前法要が忠実に再現され、「薬義」「副義」の二つの問答を同時に論義、藤探題によるご精義のお言葉をもって第一部は幕を閉じた。

伽陀の音律で自然の再生を祈る

声量豊かな実直、力強さを特徴とするが、声明の名手が揃い出仕した今般の公演は、流暢で律動の強弱がこなれ、耳に慣れたものでもすっかり聞き入ってしまうほどだった。

公演が八之座へと進むにつれ観客はすっかり声明の音色に引き込まれ、魅了されていく。本来の屋外の拝殿から比叡山に木霊する声明に比べて、劇場の音響は耳と心に余韻を残すものだった。

クライマックスを迎え公演は、ゆっくりと法要の終了を意味する「撤饌の儀」を迎え、その後退出した僧侶は拝殿の左右へと整列した。

伝承では論義を終えた僧侶が比叡山の方角に向かい「五伽陀礼拝」をもって樹木の再生を願ったと残り、僧侶は数珠を擦りながら比叡山に見立てた方角に祈りを捧げる。同時に緞帳は降り、担手喝采のなか山王礼拝講が静かに幕を閉じた。

公演を終え、聴衆に感想を聞くと、「感動した。私たち都民は山王の神々への信仰が篤い、ぜひ実際の山王礼拝講にも参列したい」との声や「神と仏が一緒に存在していることが本当にありがたい」等の声が聞かれ、さらに公演と呼ぶに相応しい内容とみな口を揃え讃えた。